九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

孟津河渡司から沿海万戸府へ : ある水軍指揮官の履歴からみたモンゴル帝国の水運と戦争

舩田, 善之
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

https://doi.org/10.15017/1650928

出版情報：史淵. 153, pp.1-30, 2016-03-18. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

孟津河渡司から沿海万戸府へ
—ある水軍指揮官の履歴からみた モンゴル帝国の水運と戦争—

船　田　善　之

はじめに

モンゴル帝国[(1)]は，クビライ Qubilai（世祖，忽必烈, 1215–1291, r.1260–1291）の時代，1274年（至元11年，咸淳10年，文永11年，甲戌）と1281年（至元18年，弘安4年，辛巳）の二度，日本に遠征軍を派遣した。日本史でいう文永・弘安の役である。この遠征・戦役については，いくつかの呼称があるが，本稿では，モンゴル帝国の日本遠征と総称し，個別には，森平雅彦（2009：267, n.27）の提唱に従い，より中立的な甲戌・辛巳の役と呼ぶこととしたい。この両戦役の事件史については，池内宏（1931）以来，重厚な蓄積がある[(2)]。

さて，辛巳の役では，鷹島（現長崎県松浦市[(3)]）の海域一帯に結集していたモンゴル軍の艦隊が，おそらく台風の暴風と波浪のために，壊滅的な打撃を受け，多くの艦船が沈没した[(4)]。とくに江南軍に大きな被害が出て，副将の范文虎の乗っていた艦船も大破した。古くより，この海域からはモンゴル軍の遺物が引き揚げられていたが，この十年実施されてきた，音波探査の結果を踏まえた考古発掘により，比較的保存状態のよい二隻の船体が発見された。これらがモンゴル軍の艦船であることは疑いなく，今後の調査とさらなる発見が期待される[(5)]。

これまで，モンゴル帝国の日本への遠征軍派遣については，対宋（南宋）戦線や宋降服後の江南の事情と連動・関連していた可能性が推測されてきた。すなわち，甲戌の役は，宋侵攻の側面作戦として宋と貿易関係のある日本を威嚇

することを目的としており，辛巳の役は，社会の不安要素となる可能性のあった大量の旧宋軍兵士のうち弱兵を日本に移民させることが企図されていた，というものである[6]。これらは，孤証・傍証に基づくものであるが，解釈としては一定の蓋然性をもつ。そして，何よりもまず，中島楽章・四日市康博（2004）と中島楽章（2013）が総括したように，辛巳の役の江南軍の艦船の多くが旧宋水軍からの転用であった。

モンゴル帝国の日本遠征とそれに至る過程に関するモンゴル側の事件史・事実関係については，これまでの研究によってほぼ整理・提示されたといってよい。他方，その目的や歴史的背景・意義については，複数の見解が提出されており，その多くが一定の妥当性・蓋然性を備えてはいるものの，議論をより精緻化していく必要がある。その際，現在の史料状況と研究の到達点から考えれば，モンゴルの日本遠征を俎上に載せるだけでは，史料の制約と視野の限界に直面してしまう。重要な当事者であった高麗[7]，上述のように密接に連動していた対宋戦争[8]や水軍・海軍・駐屯軍[9]など江南の事情はもちろんのこと，水運・海運[10]，南海遠征・貿易[11]や海防[12]など海洋政策[13]も踏まえて議論を展開する必要がある。最終的には総合的な検討が求められるが，まずは，それぞれの問題を検討し，そこから得られる知見を堅実に積み重ね，多角的に検討を加える下地を整えることが前提として必要であろう。

そこで，本稿では，甯玉（1236-1302）という一人の軍人を取り上げ，彼の事跡を跡づける。その理由は，彼が孟津河渡司の官員，対宋戦争における交通・水運・水軍方面での活躍，呉江長橋行都元帥，沿海上万戸府の万戸という興味深い経歴をもっているからである。これらは，モンゴル帝国の水運・交通，対宋戦争，第三次日本遠征の計画，ベトナム遠征，ジャワ遠征，慶元（浙江省寧波市）一帯の海防を考える上で極めて重要な情報を提供する。これにより，モンゴル帝国の対宋戦争，海を通じた対外遠征，海防政策を総合的に検討するための材料を提示したい。

1．甯玉の墓誌銘と神道碑

同時代に叙述された，甯玉の伝記史料は二件ある[14]。一つは，「有元故鎮国上将軍呉江長橋行都元帥沿海上万戸甯公墓誌銘并序」（以下「甯玉墓誌銘」と略称する）である。甯玉は1302年（大徳6年，壬寅）3月10日[15]に死去し，同年12月13日に埋葬された[16]。撰者は，翰林兼国史院侍読学士や江南諸道行御史台侍御史を務めた高凝である。甯玉の出身地孟州河陽県（河南省焦作市孟州市）に隣接した河内県（河南省焦作市沁陽市）の人であるから，甯玉とは同郷といってよい。書は，当時の孟州知州である劉漸が担当している。この墓誌銘は，1973年8月，河南省孟県大宋荘（焦作市孟州市趙和鎮大宋荘村）で出土した（中国文物研究所・河南省文物研究所1994：vol.1, 218）。尚振明・尚彩鳳（1995：14）が関係者から聞き取った証言によれば，封土を3m掘り下げたときに発見され，南面立石の状態であった[17]。なお，墓室の天井部には，封土を6m掘り下げたときに到達したとのことである。墓誌銘の拓影は中国文物研究所・河南省文物研究所（1994：vol.1, 218）と尚振明・尚彩鳳（1995：15）に，録文は中国文物研究所・河南省文物研究所（1994：vol.2, 206-207），尚振明・尚彩鳳（1995：16-17），王景荃・尚振明（1995：86-87）に，それぞれ掲載された[18]。拓影については，中国文物研究所・河南省文物研究所（1994：vol.1, 218）の方がサイズは大きいが，尚振明・尚彩鳳（1995：15）の方がより鮮明である。これらに基づけば，墓誌の大きさは縦123cm，横103cm，厚さ27cmで，銘文は38行55字，楷書で刻されている。蓋は伝わっていない。中国文物研究所・河南省文物研究所（1994：vol.1, 218）や王景荃・尚振明（1995：84）によれば，原石は孟県文化館に所蔵されていた。筆者は，2008年9月6日，井黒忍とともに，原石の現状確認を目的として孟州市文化局を訪れたが，あいにく土曜日で閉まっており，確認することはできなかった。

もう一つは，当代きっての文人の一人，閻復（1236-1312）による「大元故鎮国上将軍浙西道呉江長橋都元帥沿海上万戸甯公神道碑銘」（以下「甯玉神道碑」と略称する）である。閻復は，東平学派を代表する文人の一人で，ク

ビライ，テムルTemür（鉄穆耳，成宗，1265-1307, r. 1294-1307），カイシャンQaišan（海山，武宗，1281-1311, r.1307-1311）に仕え，官は翰林兼国史院の翰林学士承旨にまで至った。書は，史弼（1233-1318）の筆になる。史弼は，蠡州博野（河北省保定市蠡県）の出身で，クビライ時代の宋遠征で功績を挙げ，揚州路達魯花赤兼万戸，福建行省平章政事，同知枢密院事，江西行省右丞，平章政事などを歴任し，1292年（至元29年，壬辰）～1293年（至元30年，癸巳）のジャワ遠征[19]にも従軍した人物である。甯玉の長子の居仁もこの遠征に従軍している。その録文は，乾隆『孟県志』巻8「金石」64b-68a（『石刻史料新編』ser.3, vol.29, 402-404）に収められている[20]が，その原石は現存しない（尚振明・尚彩鳳1995：16）。閻復は，1306年（大徳10年，丙午）にその撰文の依頼を受けたと自ら述べており[21]，乾隆『孟県志』によれば，1309年（至大2年，己酉）2月24日に立石された。閻復の文集『静軒集』は佚書となっており，現在われわれがみることができるものは，清の繆荃孫（1844-1919）によって『国朝文類』・『元詩選』や石刻などから集められた詩文四十三篇である。これらは，『静軒集』6巻として，『藕香零拾』に編入されている。「甯玉神道碑」は，この巻5/48b-51a（『元人文集叢刊』vol.2, 564-566）にみえ，乾隆『孟県志』巻8「金石」の録文からの採録である。『全元文』巻297（vol.9, 299-302）にも収録されている[22]。

2．孟津から鄂州へ ―水運・土木・兵站の実務経験―

前節で述べたように，甯玉は，黄河中流，洛陽の対岸（北岸）に位置する孟州河陽県の人である。曾祖父の甯淵と祖父の甯源は，それぞれ孟津渡巡検，河陽屯田提挙司副使として，大金（大ジュシェン国）に仕えた。父の甯泉に至って，モンゴル帝国に仕え，懐孟勧農副使・提領課税所官となった。このように甯氏は，ジュシェン・モンゴルの王朝交替をはさんで，三代にわたり，現地の地方官を担った家系であった。オゲデイÖgedei（窩闊台，太宗，1186-1241, r.1229-1241）時代の1236年（オゲデイ8年，丙申）[23]，甯泉と夫人韓氏との間

に生まれたのが甯玉である。甯玉の天性は勇敢で武芸を習い，モンケ Möngke（蒙哥，憲宗，1209–1259, r.1251–1259）時代の1252年（モンケ2年，壬子），十七歳の時に水軍に属し，モンゴル帝国の漢地・江南戦線を支えた軍閥の領袖張柔（1190–1268）[24] の目にとまって，孟津渡（河南省洛陽市孟津県）の長に抜擢された[25]。折しも，クビライがモンケから漢地経営を任され，張柔が対宋戦線の前線の重要拠点の一つである亳州（安徽省亳州市）に移った翌年であった。甯玉は，自身の出身地であり，黄河の南北を結ぶ要衝を任されたのであった。張柔によるこの人事は，おそらく，甯玉が黄河の渡し場を含むこの一帯の交通と地勢，水軍や河船について知悉していたためであろう。なお，「甯玉墓誌銘」がこの官署を「孟津河渡司」と伝えるのに対して，「甯玉神道碑」はその職名を「盟津渡長」と伝える。「盟津」は「孟津」の異称である。「孟津河渡司」は，中央政府により現地に固定的な官署が置かれたような印象を受けるが，「盟津渡長」という表現がよりその実体を表しており，その内実は，張柔の裁量により渡し場としての孟津の管理運営を委ねられたとみなすべきであろう。そのなかば私的な現地機関が「孟津河渡司」と呼ばれたと考えられる。

1258年（モンケ8年，宝祐6年，戊午），モンケは自ら宋遠征軍を率い，四川を目指して南下し，クビライは長江中流域の東方戦線を担当した。甯玉は，翌1259年には現在の河南省南部から湖北省北部へ進軍していたクビライ率いる左翼軍（李天鳴1988：733, 743）の兵站を担当し，鄧州（河南省南陽市鄧州市）・宿州（安徽省宿州市）・亳州からの補給輸送を監督した。なお，亳州は，上述のように張柔の前線の拠点であり，張柔自身は，軍を率いて虎頭関（湖北省黄岡市麻城市）を抜けて，長江中流の要衝鄂州（湖北省武漢市）へ向かっていた（李天鳴1988：743）。その後，釣魚山（重慶市合州区）包囲中のモンケが病没した知らせを受けたクビライは，長江を渡って鄂州を攻撃した後，軍を北へ返した[26]。「甯玉神道碑」，「甯玉墓誌銘」ともに，甯玉がクビライの軍に従軍して長江を渡り，その功績によって百夫長に昇進したと述べている。クビライは，1260年（中統元年，庚申）の即位後，内戦，すなわちアリク・ボケ Ariγ böke（阿里不哥，1219–1266, r.1259–1264）とのカーン位継承戦争に忙殺さ

れる一方で，中都燕京東北郊に新都（大都）造営を命じる。この間の中都防衛及び大都城築城工事の人員動員と監督を委ねられたのが張柔であった（渡辺健哉2002：74-75）[27]。甯玉も張柔の下で大都造営に従事することとなった。具体的な業務は，「甯玉神道碑」によると，河道官として，大都城西郊の玉泉山からの水路（金水河）を開鑿することだったようだ。この工事を完了させた後，膠州（山東省青島市膠州市）に駐屯し，千夫長に昇進した[28]。

ここまでの甯玉の経歴をみると，以下のようにまとめることができよう。代々交通の要衝で下級地方官を務めた家に生まれた彼は，モンゴルと宋とが戦火を交える過程で，おそらく現地の地勢と黄河の水運に知悉していたことにより，漢人指揮官の張柔に見出された。そして，その麾下で，現場の交通・輸送といった後方支援の実務を引き受ける下級軍人としてキャリアを積んでいく。鄂州の役に従軍したことにより，百夫長となるが，目を見張るような抜擢とは言い難い。クビライとの謁見もなかったとみえ，とりたてて特記するような褒賞に与ったわけではないようだ[29]。しかしながら，大都造営で着実に任務を完了したことにより，千夫長への昇進を実現する。来たる対宋戦争に備え，当時のモンゴルは将校・兵士の需要が増大していたはずで，その需要に対応する形で甯玉は出世したとみなすこともできる。その意味で，大都造営を始めとする各種土木工事は，非交戦時の将校・兵士のための公共事業として機能したと同時に，彼らが実績を挙げるための機会も提供したのであった。

３．襄樊から呉江・慶元へ
―宋遠征への再度の従軍と江南における駐屯―

1268年9月（至元5年，咸淳4年，戊辰），アジュ Aǰu（阿朮，1226-1280），劉整（1211-1275）率いるモンゴル軍は襄陽（湖北省襄陽市襄城区）・樊城（襄陽市樊城区）の包囲と周辺の軍事拠点の築城を開始した（李天鳴1988：954-955；舩田善之2012/2014：10-11）。この時[30]，甯玉は，鄧州の七里河（湍河。下流で白河に合流し，さらに襄陽附近で漢水に合流する）などの水運を開通さ

せるとともに，三十箇所あまりの堰を築いて二百艘あまりの戦艦を投入し，新野（河南省南陽市新野県）から南方への兵站を支援した。1270年（至元7年，咸淳6年，庚午），前年正月より襄樊へ派遣されていた（李天鳴1988：965）史天沢（1202–1275）によって暫定的に万戸となり，襄陽城西の万山の築城に従事してそこに駐屯するとともに，浮き橋の設置と漢水の渡し場の管理，水軍の訓練にも従事した(31)。襄樊包囲戦に際し，万山における築城を進言した一人であり，万山の駐屯軍を指揮したのは，張柔の第九子で対宋戦争に大きな功績を挙げた張弘範（1238–1280）であった（李天鳴1988：988–991；舩田善之2012/2014：11）(32)。前節で述べたように，張柔によって抜擢された甯玉は，張柔とその一族の軍団の指揮下にあったと推測される。この時も，直接には，張弘範の指揮下にあったのであろう。

1273年（至元10年，咸淳9年，癸酉）正月，樊城が陥落し，翌2月に襄陽が開城・投降した。そして，翌1274年（至元11年，咸淳10年，甲戌）よりバヤンBayan（伯顔，1236–1295）を総司令官とするモンゴル軍は，漢水・長江沿いに臨安（浙江省杭州市）を目指して進軍していく（李天鳴1988：1055–1066, 1135–1196）。甯玉は戦艦100艘・1000人の軍で先導し，白河(33) に浮き橋を設置して軍を渡し，沙洋（湖北省荊門市沙洋県）を陥落させた。12月に本軍は長江を渡り，鄂州も開城・投降した（李天鳴1988：1160–1162）。甯玉は，50艘の軽舟と1000人の軍で南岸を奪い，戦艦を指揮してモンゴル軍の長江渡河を完了させた。鄂州より下流の黄州（湖北省黄岡市黄州区）・寿昌（湖北省鄂州市）・安慶（安徽省安慶市）・池州（安徽省池州市）を降す際にも，浮き橋の設置に従事し，遅滞なく行軍させた。彭蠡湖（鄱陽湖，江西省北部）での浮き橋設置に際しては，風濤のため難航するが，巨石を碇とすることで解決する。夏貴（1198–1280）・賈似道（1213–1275）率いる宋軍と交戦した丁家洲（安徽省銅陵市）の戦いでは，バヤンの命で投石機の設置と攻撃に従事した。この戦いで宋軍は潰走し，モンゴル軍は，蕪湖（安徽省蕪湖市）を降し，ついで建康（江蘇省南京市）に入城した(34)。

一連の功績により，甯玉は，1275年（至元12年，徳祐元年，乙亥）3月，管

軍千戸となり金符を授けられた。ここに至って，ようやく現地司令官ではなく，カーンと中央政府の任命を直接受けた公式の軍官となったのである。建康では，橋梁・戦艦をつかさどり，巨艦の築造を監督した。うち20艘をもって龍湾口[35]の防衛を担い，7月には東の真州（江蘇省揚州市儀徴市）より到来した宋軍の夜襲により，浮き橋の軍営を切断されるものの，巨艦によって挟撃し，宋軍を撃退している。1276年（至元13年，徳祐2年，丙子），常州（江蘇省常州市）・平江（江蘇省蘇州市）・松江（上海市松江区）や太湖方面への先遣隊に従軍している。管軍総管となり，散官として宣武将軍（従四品）も授かった。この年の正月には，宋が臨安を開城して降服している。その後，バヤンやアジュら一級の司令官たちは，大都・上都に凱旋し，彼らに次ぐ司令官らの指揮の下，旧宋領域各地への進駐や残存勢力の掃討作戦が進められることとなる（堤一昭1998：180; 2000a：5-15）。臨安開城に先立つ1275年，バヤンは，呉江（江蘇省蘇州市呉江区）から嘉興（浙江省嘉興市）に至る南北交通の要衝であった長橋を甯玉に修築させた上で，その防備を担当させた。長橋は，1048年（慶暦８年）に架けられた利往橋で，併設された亭の名をとって垂虹橋とも呼ばれる。宋は，モンゴル軍の進撃をくいとめるために，この長橋を撤去していたのである。1277年（至元14年，丁丑），甯玉は，この防備・管理を担当する鎮守長橋等処総管となり，散官は明威将軍（正四品）に昇級した。1278年（至元15年，戊寅）には，金虎符を授かり，管軍万戸となって散官は昭勇大将軍（正三品）に昇級した。この間，河川交通の要衝を押さえ，軽舟による巡回・警戒を行うとともに，一帯の反乱勢力の鎮圧・殲滅に従事した。その後，行浙西道呉江長橋都元帥府事となり，散官は鎮国上将軍（従二品）まで昇進した。そして，1285年（至元22年，乙酉）には，沿海上万戸に就任した[36]。

「甯玉墓誌銘」は，甯玉の軍官としての経歴について，「初め国朝（モンゴル帝国）の官制は簡約であり，軍職に任じられるものは百夫長・千夫長より，万戸に至った者は（地位が）極めて高く，国朝は今に至るまでこれによっている」[37]と述べる。当初は，張柔・張弘範・史天沢・バヤンといった現場の司令官による抜擢ないし任命に過ぎず，カーン・中央政府から直接の任命を経て

おらず，散官も伴っていなかった。こうした事情に対する説明も兼ねているのであろう。当時の駐屯軍や遠征軍において，このような抜擢と任命はむしろ恒常的に行われていたと思われる。甯玉は，その経験と資質を活かしてかれらの期待に応え，都元帥・万戸の地位まで出世するに至った。

さて，宋遠征において甯玉が一貫して担った主たる任務は一目瞭然である。河川の要衝における浮き橋など橋梁の設置・修築であった。これによって，モンゴル軍による軍事上の要衝の統御と，軍隊の円滑な渡河・進軍に貢献したのであった。史料は必ずしも言明していないが，出身地であり，最初のキャリアである孟津渡での経験とノウハウが高く買われたのは疑いない。これに加えて，大都造営における水路開通・土木工事に従事した経験も大いに活かされたはずである。浮き橋の設置や軍隊の渡河には，船舶の建造・調達やその航行のノウハウも求められたであろう。甯玉は，船舶建造の監督はもちろんのこと，実際に水軍を率いて補給・戦闘にも従事しており，このような要求にも沿うことのできる人材であった。宋降服後に委ねられた，蘇州から嘉興へ抜ける長江下流南岸随一の要衝であった長橋の修築と防備は，反抗勢力の掃討及びその後方支援のみならず，華北と江南の連結を担う重責でもあり，彼の手腕に対する期待は大きいものであった。そして，1285年の慶元（浙江省寧波市）に設置された沿海上万戸府の万戸への就任も，それまでの実績が評価されての人事であったといえる。

4．沿海万戸府の系譜と甯玉

前節で述べたように，1285年（至元22年，乙酉）に甯玉は沿海上万戸府の万戸に就任する。沿海上万戸府の設置自体がこの年2月のことであり(38)，設置と同時に甯玉は万戸に就任したと思われる(39)。まず，設置に至るまでの経緯を確認しておこう。堤一昭（1998：188-189）が指摘したように，モンゴル帝国の江南における本格的な駐屯軍配置は，1281年（至元18年，弘安4年，辛巳）末頃からである。1279年（至元16年，己卯）に崖山の戦いで宋の亡命政権を

壊滅させるまでは，いくつかの軍団が転戦中であり，また1281年には日本へ遠征軍を派遣していたためである。同年8月，征日本行省（征東行省）左丞相アタカイ*Ataqai（阿塔海，1234–1289）を三海口[40]などに駐屯させ（堤一昭1998：189–190），さらに11月には，日本から帰還した軍隊を沿海に配置・駐屯させている[41]。1282年（至元19年，壬午）には，長江中流域から下流域を始め，江南各地の駐屯地設定がなされた（堤一昭1998：189–190）。

その後の江南における駐屯軍に関する大幅な制度改変が，沿海上万戸府を含む37の万戸府の設置（1285年2月）であった[42]。これは，江淮・江西におけるモンゴル軍・漢軍・新附軍を再編し，駐屯地の行枢密院へ所属させるものであった（堤一昭1998：190–192）。この37の万戸府を統轄する立場になったのが，マングダイMangγudai（忙兀台，忙兀帯，?–1290頃）であった。宋が降服した1276年（至元13年，德祐2年，丙子）以降，マングダイは，福建方面の掃討戦に従事し，その後しばらく福建で海上を通じた食料輸送などに従事していたが，1285年10月に，江浙行省左丞相として杭州（浙江省杭州市）に帰還した（堤一昭2000：26–29；大島立子2002：9–22；向正樹2009：37–40）。37の万戸府の設置については，大葉昇一（1990），堤一昭（1998：190–192; 2000：26–29）及び向正樹（2009：37–40）がその歴史背景及び意義について重要な指摘を行っている。とくに，大葉昇一（1990: 149–154）は，沿海上万戸府の編成や1312年（皇慶元年）前後の婺州（浙江省金華市）・処州（浙江省麗水市）への移駐とそれに代わって慶元に移駐した蘄県翼上万戸府について議論している。ただし，甯玉についてはとくに考察を加えていない。以下では，まず，沿海上万戸府の設置場所を確認する。次に，これら先行研究の知見に基づいた上で，二つの問題について議論を深めたい。

沿海上万戸府の設置地点については，地方志に記録が残っており，慶元路（浙江省寧波市）に置かれていたことが分かる。まず，延祐『四明志』巻8「城邑攷上」公宇・万戸府に，以下のような記述がある。

録事司の西北隅の永済坊にあり，すなわち宋の簽判庁である[43]。

次に，大葉昇一（1990：150）も引用する至正『四明続志』巻3「在城」公宇・

万戸府は，次のように述べる。

> 西南隅の永済坊の明遠楼の西にあり，もとは宋の〔慶元〕府の倉ならびに節推庁の基であった。至元十三年（1276），沿海招討司を設置し，後に沿海左副都元帥府とし，ついで沿海上万戸府と改めた[44]。

宋代の情報になるが，宝慶『四明志』「羅城」図[45]（14–15）は，子城（内城）南門の西南に永済坊をプロットしている。モンゴル帝国時代の慶元路の永済坊もこの地点であったとみてよい。明遠楼は，宋代の子城南門すなわち奉国軍門が1321年（至治元年）に重建されたものであり，現在の鼓楼に位置する（寧波市文物考古研究所2013：134）。また，同図は，子城南門の東西に節推庁と簽判庁を，それぞれ描く。同「府治」図（16–17）も，同様に奉国軍門の東西に節推庁と簽判庁をそれぞれ配し，さらに，各々の北側に常平倉と府都倉をそれぞれ置く。この府都倉が至正『四明続志』のいう「府倉」とみてよい。府都倉と節推庁とは相互に離れており，至正『四明続志』のいう「節推庁の基」とする説明には矛盾が生じる。ただし，モンゴル時代の平準庫について，延祐『四明志』は宋代の節推庁の地点といい，至正『四明続志』は宋代の簽判庁の地点といい（寧波市文物考古研究所2013：134），両者の地点は混同されることが多かったようである。以上を踏まえれば，延祐『四明志』の「簽判庁」に従うべきであり，沿海上万戸府のオフィスは，明遠楼＝子城南門の西側，永済坊，宋代の府都倉と簽判庁の地点に位置していた。したがって，現在の寧波市海曙区の中心，中山西路の鼓楼の西側（鼓楼を貫く南北中軸線をはさんで東側の永豊庫遺址と対称の地点あたり）に比定できる[46]。

問題の第一は，37の万戸府の配置場所である。37の万戸府には，真定・益都・懐州・孟州など華北の地名を冠する万戸府を含む[47]。堤一昭（1998：191–192）は，これらが本拠を華北にもちながらも一部が江南に駐屯した可能性を示唆する。堤が傍証とするのは主に次の二点である。まず，この設置に関する記事が江淮・江西の駐屯軍の再編についてであるから，37の万戸府の部隊は江淮・江西行省管内に駐屯したと考えられる。次に，モンゴル帝国の駐屯軍・遠征軍の編制と呼称の事例と傾向から，これら万戸府の名称も部隊の編制・出身

地を指すと類推できる。そして，これを踏まえ，「モンゴル帝国の駐屯軍が江南に少なく，かつ長江流域に偏在することが江南支配の脆弱性を示す，との通説」は，この記事の「解釈を誤ったものであり，根本的な再検討を要する」と，モンゴル帝国の江南統治の根幹に関わる重要な問題提起を行っている（堤一昭1998：191, 193）[48]。

至正『四明続志』巻3「在城」公宇・万戸府の上引箇所の後文は，万戸府のその後の沿革，「重建沿海上万戸府達魯花赤哈剌觧徳政記」[49] の録文をはさんで，万戸府管轄の鎮撫所・蒙古千戸所の所在及び6翼の上千戸所と11翼の下千戸所の名称を列挙する。それによれば，鎮撫所は慶元路城内にあって万戸府に属し，蒙古千戸所は定海県（浙江省寧波市鎮海区）に駐屯していた。そして，上千戸所6翼の名称は，館陶・東平・莘県・斉河・徳州・東平，下千戸所11翼の名称は，（荏）〔荏〕平・彰徳・東昌・冠州・夏津・長清・単州・武城・高唐・濮州・泰安であった[50]。一見して知られるように，すべてが華北のうち中書省直轄地域の地名であり，ほとんどが山東に属する。大葉昇一（1990：151–153）が指摘するように，これらの千戸所の名称は所属する兵士の出身地に由来すると考えられる。このように，沿海上万戸府管轄下の千戸府の名称についても同様の状況を見出すことができ，上の堤一昭の類推に確証を与える[51]。

問題の第二は，37の万戸府の設置を含む軍事面での大幅な改組の理由である。堤一昭（1998：191）は，その理由を見出していないと述べる。ただし，実は堤自身が述べているように，ちょうどこの時期，江南全体を統括する江南諸道行御史台（江南行台）[52] 廃止と権限を縮小した上での再設が実施され，同時に福建行省の江西行省への合併，行省ごとの行枢密院設置が，盧世栄（?–1285）によって提案され裁可された。おそらくは前年1284年より中書右丞となっていた盧世栄によって主導された財政・商業政策に伴い，江南統治政策の転換が図られたのであろう。交通・輸送は，軍事と密接に連動するものであり，盧世栄は，自らの財政・商業政策推進のために，江南駐屯軍の編成と統属関係の整理，実質的には軍事統帥権の分散化を進めようとしたのであった（大島立子2002：13–14；向正樹：2009：51, n.20）。華北と江南を結ぶ要衝であっ

た呉江長橋の交通と軍事を担っていた甯玉の配置転換もその一環だったと思われる。盧世栄のこのような軍事方面に対するある意味で強引な政策・人事介入は，彼に対する断罪と彼の失脚を招くこととなったのである(53)。

甯玉が就任した万戸は沿海上万戸府の次官である。その長官であるダルガ daruγ-a（ダルガチ daruγači，達魯花赤）は，カラダイ Qaradai（哈剌觧，合剌帯，哈剌歹，1237-1307）(54) であった。カラダイは，中央アジアのテュルク系遊牧民カルルク（Qarluq, Qarluγ，哈剌魯，合剌魯，哈魯，合魯）出身の軍人で，宋遠征に水軍の下級指揮官として従軍し，1275年（至元12年，徳祐元年，乙亥）の焦山（江蘇省鎮江市）の戦いの後，水軍の指揮官として，長江下流から沿海の港湾・拠点であった江陰（江蘇省無錫市江陰市）・許浦（江蘇省蘇州市常熟市滸浦鎮）・金山（上海市金山区小金山島）・上海（上海市）・崇明（上海市崇明県）・金浦を降し，海船300艘あまりを拿捕し，澉浦海口（浙江省嘉興市海塩県澉浦鎮）に駐屯した。宋が降服した1276年（至元13年，徳祐2年，丙子）以降は，沿海招討副使から沿海経略副使・沿海経略使兼左副都元帥へと昇進し，慶元を本拠として宋の残存勢力の掃討・帰順に従事し，さらに，長江沿岸の許浦から，温州（浙江省温州市）・福州（福建省福州市）・広州（広東省広州市）など華東・華南に至る沿海地域まで，広範な水域・海域を転戦する。1279年（至元16年，己卯）に崖山の戦いで宋の亡命政権が壊滅すると，慶元に帰還し，8月にはクビライに謁見して褒賞を受け，沿海左副都元帥・慶元路総管府達魯花赤となって慶元に駐屯した。1281年（至元18年，弘安4年，辛巳），辛巳の役に従軍し，無事帰還を果たし，1282年（至元19年，壬午）2月再び慶元に駐屯する。そして，1285年の沿海上万戸府設置に伴い，長官であるダルガに就任したのであった(55)。以上から明らかなように，沿海上万戸府の駐屯軍は，宋降服後，長江下流から華東・華南沿海地域の軍事を担ったカラダイの水軍・海軍を基幹とする軍団であった。

それでは，甯玉は，なぜ，華北と江南を結ぶ要衝であった呉江長橋の交通と軍事を担う行浙西道呉江長橋都元帥府事から，沿海上万戸府の万戸へ転任させられたのであろうか。先述のように，それは，盧世栄による財政・商業政策推

進と連動した江南駐屯軍の編成と統属関係の整理の一環であった。しかし，これだけでは，行浙西道呉江長橋都元帥府事を他の人物と交替したことの説明にしかならないだろう。沿海上万戸府の万戸に任命されたのは，やはり甯玉の経歴と能力が考慮されたと考えるべきである。水運・船舶・軍事に通じた指揮官は，慶元に駐屯する軍団にとって，その役割と活躍を強く嘱望されたはずである。確かに，甯玉の経歴と能力は，沿海地域ではなく，河川・運河・橋梁に特化したものであった。しかしながら，慶元路は，沿岸地域の港湾都市といっても，城郭自体は，海岸に面しているわけではなく，甬江河口から遡った余姚江と奉化江の合流点に面した河港都市であり，城内外には運河と水路が張り巡らされていた(56)。まさに河川・運河・橋梁のエキスパートが必要とされる地勢である。そして，沿海防備においても，河川・運河航行に関する知識・技術が有効な部分は少なくなかっただろう。日本遠征を始めとして海を渡る対外遠征にも平底の河船とその人員が動員されていた可能性が指摘されている（中島楽章・四日市康博2004：46-47；中島楽章2013：107-112）。また，平江・呉江一帯の情勢と交通が安定し，相対的に軍事上の重要度の増した沿海地域が，甯玉のような経験のある指揮官を必要としていた背景も考慮に入れなければならない。

加えて，ここで注目したいのは，甯玉の膠州における駐屯経験である(57)。史料は言明しないが，この駐屯は明らかに，東シナ海を北上して攻撃してくる宋軍を想定した防備，高麗の反モンゴル勢力，三別抄への対応・攻撃を睨んだものであった。さらに，海路による日本や宋に対する遠征にも含みがあったかもしれない。いずれにせよ，甯玉は，膠州で海港の港湾整備や海船航行に関する知識・技術を獲得し，経験を積んだに違いない。この経験は，その後の甯玉の経歴にも活かされ，そして慶元の沿海上万戸府における海防の任務でも，それが大いに期待されたはずである。それは，第三次日本遠征を見据えたものであった(58)。

しかしながら，第三次日本遠征が実行に移されることはなかった。そして，甯玉が従軍したのは，クビライの皇子トガンToγan（脱歓，鎮南王，?-1301）

による1287年（至元24年，重興3年，丁亥）からのベトナム（大越，陳朝）遠征[59]であった[60]。モンゴル軍は，ベトナムに敗れるが，甯玉は山地での軍路の開通や軍営地の建設などに貢献した。病気にかかったこともあり，帰還後，長男の甯居仁が沿海上万戸の職を継承することとなった。甯玉自身は前職の任地であった呉江の私宅で晩年を過ごした[61]。

おわりに

本稿では，孟津の黄河の渡し場の現地採用軍人が二度の宋遠征に従事し，行浙西道呉江長橋都元帥府の都元帥，慶元に置かれた沿海上万戸府の万戸へと昇任していく過程を追い，モンゴル帝国の対宋戦争・日本遠征及び宋残存勢力掃討における交通・水運・戦争・海防に関する歴史的な背景を描出した。従来，モンゴルの戦争は，どちらかといえば，国家戦略や，モンゴル統治層・政策立案者や軍団長・司令官クラスの動向と経歴から，議論される傾向にあった。甯玉の経歴は，これらとは一線を画すものであり，彼が担った任務は，極めて個別的かつ実際的・実務的なものであった。だからこそ，モンゴル軍の進軍と戦闘において，それぞれの要所で効果的な役割を果していたといってよい。本稿が提示した甯玉の経歴によって，われわれのモンゴルの戦争の実情に対する理解はより立体的なものとなった[62]。

甯玉は，もともとこれといったステイタスやコネクションをもっていない，地方の下級官吏の家系に生まれ，本人のキャリアも現地採用の下級軍人からスタートしている。そのキャリアのステップアップの過程をみても，本人の能力と実績に依るところが大きい。そこでは何よりも，甯玉が，河陽・孟津の出身であったことが有利に働いた。黄河中流の渡し場で生まれ育った甯玉は，河船とその航行や築造・修復，そして船舶あるいは浮き橋設置による大河渡河の知識と技術に習熟していた。当時，対宋戦争を最大の課題としていたモンゴル帝国の中央政府と宋遠征に従事する司令官たちにとって，このような知識と技術を有する人材に対する需要は極めて高かった。甯玉は，この時流にうまく乗っ

て，軍人・軍官としてのキャリアを着実に踏んでいくことになる。そして，この過程でさらなる知識・技術とともに，経験と実績を手に入れていく。大都造営時の水路開鑿や宋遠征時の浮き橋設置・修復や水軍による攻撃，軍事拠点の防備で司令官の期待に応え，宋降服後は，呉江長橋の駐屯軍の長官として，長江デルタ地域で随一の要衝の管理・防備に従事した。

甯玉にはさらなる転機が待っていた。中央政府の政策転換，軍事・貿易の主導権争いにも起因する駐屯軍の再編を経て，慶元に駐屯する沿海上万戸府の次官に配置換えとなった。最終的にはベトナム遠征に従軍した後，長子に自分の地位を継がせてリタイアした。甯玉は，もともと河船の航行・築造・修復，渡河など河川交通のエキスパートであった。しかし，山東沿岸の膠州に駐屯した経験もあり，海船の航行や，沿岸防備にも通じていたと思われる。そもそも，慶元は，甬江河口を遡った河港都市であり，河川・水路など水運の結節点でもあり，甯玉の知識・技術・経験は十分に活用されたであろう。

モンゴル帝国において，沿江・沿海の交通・輸送・軍事に従事する人材の相互転任・転用は，甯玉の事例を挙げるまでもなく，決して珍しいことではない。モンゴル帝国や現地の司令官からみれば，沿江・沿海の交通・輸送・軍事は一体のものであったろう。

本稿では，主として甯玉が戦争・土木事業において果たした役割とそのキャリアのステップアップに注目して，モンゴル帝国東南部の交通・水運・戦争・海防について議論を展開した。上述したように，甯玉はもともとさしたるコネクションを有していなかった。とはいえ，当然ながら，そのキャリアを積んでいく過程で，司令官を始め有力な人物とのコネクションをもつようになっていく。甯玉とその子孫がもつこととなった人的ネットワーク(63)は，モンゴル帝国時代の軍人家系の勢力拡大・生存戦略の一つのモデルを見出すことができるといってよい。この問題については，稿を改めて論じることとしたい。

史料

羅濬撰　宝慶『四明志』：成文出版社（1983）輯『中国方志叢書』華中地方浙江省，vol. 575,

台北：成文出版社（宝慶年間抄本影印）
李謙撰「故鎮国上将軍江東道宣慰使蒙古漢軍都元帥張公墓誌銘并序」：易県博物館（1986：72-74）；中国文物研究所・河北省文物研究所（2004: vol.1, 165, vol.2, 120）
高凝撰「有元故鎮国上将軍呉江長橋行都元帥沿海上万戸甯公墓誌銘并序」（「甯玉墓誌銘」）：中国文物研究所・河南省文物研究所（1994：vol.1, 218, vol.2, 206-207）；尚振明・尚彩鳳（1995：15-17）；王景荃・尚振明（1995：86-87）
閻復撰『静軒集』：新文豊出版公司編輯部（1985）編『元人文集珍本叢刊』（全8冊）台北：新文豊出版公司，vol.2（繆荃孫輯『藕香零拾』本影印）
鄧文原撰『巴西集』：台湾商務印書館（1983-1986）『景印文淵閣四庫全書』（全1500冊）台北：台湾商務印書館，vol.1195
危素撰『危太樸文集』新文豊出版公司編輯部（1985）編『元人文集珍本叢刊』（全8冊）台北：新文豊出版公司，vol.7（劉氏嘉業堂刊本影印）
袁桷撰　延祐『四明志』：中国地志研究会（1978）編『宋元地方志叢書』（全12冊）台北：中国地志研究会，vol.9（咸豊4年甬上徐氏煙嶼楼刊本影印）
王元恭撰　至正『四明続志』：中国地志研究会（1978）編『宋元地方志叢書』（全12冊）台北：中国地志研究会，vol.9（咸豊4年甬上徐氏煙嶼楼刊本影印）
宋濂撰『元史』：宋濂（1976）撰『元史』（全15冊）北京：中華書局；中央研究院『漢籍電子文献　瀚典全文検索系統』http://hanji.sinica.edu.tw/
仇汝瑚修；馮敏昌等纂　乾隆『孟県志』：新文豊出版公司編輯部（1986）編『石刻史料新編』第3輯（全40冊）台北：新文豊出版公司, vol.29（乾隆55年刊本，巻7-9「金石」のみ影印）
張主敬修；楊晨纂　光緒『定興県志』：成文出版社（1983）輯『中国方志叢書』華北地方，vol.200，台北：成文出版社（光緒16年刊本）
柯劭忞撰『新元史』：上海古籍出版社・上海書店（1989）編『元史二種』（全2冊）上海：上海古籍出版社・上海書店，vol.1
李修生主編『全元文』：李修生（1997-2005）主編『全元文』（全61冊）南京：江蘇古籍出版社

参考文献

※再録・再版のある文献については，最新版に依拠した。

【欧文】

Hsiao, Ch'i Ch'ing. (1978) *The Military Establishment of the Yuan Dynasty*. Cambridge: Harvard University Press
Rybatzki, Volker. (2006) *Die Personennamen und Titel der mittelmongolischen Dokumente: Eine lexikalische Untersuchung*. Doctoral dissertation, Institute for Asian and African Studies, Faculty of Arts, University of Helsinki.

【和文】

池内宏（1931）『元寇の新研究』（全2冊）東京：東洋文庫

池田栄史（2013）「鷹島海底遺跡における水中考古学調査と発見した元寇船」『月刊考古学ジャーナル』641：24-28

池田栄史（2015）『水中考古学手法による元寇沈船の調査と研究』（第1冊・第2冊）平成23年度～平成27年度科学研究費補助金（基盤研究（S））研究成果報告書，沖縄：琉球大学法文学部考古学研究室

池田栄史・根元謙次（2009-2011）『長崎県北松浦郡鷹島周辺海底に眠る元寇関連遺跡・遺物の把握と解明』（全3冊）平成18年度～平成22年度科学研究費補助金（基盤研究（S））研究成果報告書，沖縄：琉球大学法文学部考古学研究室

石井正敏（2013）『鎌倉「武家外交」の誕生：なぜ，モンゴル帝国に強硬姿勢を貫いたのか』東京：NHK出版

岩間徳也（1925）「元張百戸墓碑考」『満蒙』65：14-31

植松正（1968）「元代江南の豪民朱清・張瑄について―その誅殺と財産官没をめぐって―」『東洋史研究』27/3；植松正（1997：297-335）

植松正（1997）『元代江南政治社会史研究』東京：汲古書院

植松正（2001）「元代浙西地方の税糧管轄と海運との関係について」『史窓』58：111-118

植松正（2003）「元初における海事問題と海運体制」京都女子大学東洋史研究室編『東アジア海洋域圏の史的研究』京都：京都女子大学：75-142

植松正（2004）「元代の海運万戸府と海運世家」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』3：111-170

植松正（2007）「元代海運の評価と実像」追悼記念論叢編集委員会編『山根幸夫教授追悼記念論叢　明代中国の歴史的位相（下）』東京：汲古書院：5-22

榎本渉（2001/2007）「元朝の倭船対策と日元貿易」（初出時表題「順帝朝前半期における日元交通―杜絶から復活へ―」「日本遠征以後における元朝の倭船対策」「日元関係史料としての『抜質神道碑』）『日本歴史』640，2001；『日本史研究』470，2001；国際シンポジウム「古代東亜海域的文化交流：以11～16世紀寧波－博多関係為中心」報告，浙江工商大学，2007；榎本渉（2007：106-175）

榎本渉（2007）『東アジア海域と日中交流―9～14世紀―』東京：吉川弘文館

大島立子（2002）「元朝福建地方の行省」『愛大史学』11：1-25

大葉昇一（1990）「元代の江南デルタ地帯における屯戍」『栃木史学』4：129-158

川添昭二（1977）『蒙古襲来研究史論』東京：雄山閣出版

工藤健（2003）「元代の江南行台について―その歴史的展開に関する一考察―」『北大史学』43：1-23

桑原隲蔵（1923/1989）『蒲寿庚の事蹟』東京：平凡社（初版，『宋末提挙市舶西域人蒲寿庚の事蹟』上海：東亜攻究会，1923；再版，『唐宋時代に於けるアラブ人の支那通商の概況

殊に宋末の提挙市舶西域人蒲寿庚の事蹟』東京：岩波書店，1935；再録，『桑原隲蔵全集　第五巻　蒲寿庚の事蹟　考史遊記』東京：岩波書店，1968）
佐伯弘次（2014）編『東アジアにおけるモンゴル襲来関係地資料集』平成23年度～平成27年度科学研究費補助金（基盤研究（S））「水中考古学手法による元寇沈船の調査と研究」研究成果報告書，文献資料編第1冊，福岡：九州大学大学院人文科学研究院
佐伯弘次・森平雅彦・舩田善之（2010-2011）編『《元寇》関係史料集（稿）』（全3冊）平成18年度～平成22年度科学研究費補助金　基盤研究（S）「長崎県北松浦郡鷹島周辺海底に眠る元寇関連遺跡・遺物の把握と解明」（課題番号18102004）研究成果報告書，福岡：九州大学大学院人文科学研究院
佐伯弘次・森平雅彦・舩田善之・池田栄史（2012）編『九州史学会シンポジウム「戦跡からみたモンゴル襲来―東アジアから鷹島へ―」』福岡：九州大学大学院人文科学研究院
櫻井智美（2009）「元代カルルクの仕官と科挙―慶元路を中心に―」『明大アジア史論集』13：173-187
島田貞彦（1931）「岩間氏発見の「元張百戸墓碑」に就いて」『歴史と地理』28/5：420-424
杉山正明（1982）「クビライ政権と東方三王家―鄂州の役再論―」『東方学報』京都54；杉山正明（2004：62-126）
杉山正明（1996）『モンゴル帝国の興亡〈下〉―世界経営の時代』東京：講談社
杉山正明（2001）「大陸から見た蒙古襲来」（初出時表題「世界を襲った元寇」「モンゴル帝国，アジア征服の猛威」）NHK出版編『北条時宗』東京：NHK出版；『歴史と旅』28/2；杉山正明（2002）；杉山正明（2006：301-326）
杉山正明（2002）『逆説のユーラシア史』東京：日本経済新聞社
杉山正明（2004）『モンゴル帝国と大元ウルス』京都：京都大学学術出版会
杉山正明（2006）『モンゴルが世界史を覆す』東京：日本経済新聞社
檀上寛（2001）「元末の海運と劉仁本―元朝滅亡前夜の江浙沿海事情」『史窓』58：119-130
檀上寛（2003）「方国珍海上勢力と元末明初の江浙沿海地域社会」京都女子大学東洋史研究室編『東アジア海洋域圏の史的研究』京都：京都女子大学：143-212
檀上寛（2006）「元明時代の海洋統制と沿海社会」（初出時表題「総論」）檀上寛『元明時代の海禁と沿海地域社会に関する総合的研究』平成15年度～17年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書，京都：京都女子大学文学部；檀上寛（2013：17-67）
檀上寛（2013）『明代海禁＝朝貢システムと華夷秩序』京都：京都大学学術出版会
堤一昭（1996）「元朝江南行台の成立」『東洋史研究』54/4：71-102+1pl.
堤一昭（1998）「大元ウルスの江南駐屯軍」『大阪外国語大学論集』19：173-198
堤一昭（2000a）「大元ウルス治下江南初期政治史」『東洋史研究』58/4：1-32+1pl.
堤一昭（2000b）「大元ウルス江南統治首脳の二家系」『大阪外国語大学論集』22：193-218
冨尾武弘（2006）「「ジャワ元寇補遺」―元寇後の爪哇・元朝交渉中の一側面―」『摂大人文科学』14：47-53
長崎県松浦市教育委員会（2012）編『松浦市鷹島海底遺跡　総集編』（第2版，松浦市文化財

調査報告書　第４集）松浦：長崎県松浦市教育委員会
中島楽章（2013）「元朝の日本遠征艦隊と旧南宋水軍」中島楽章・伊藤幸司編『寧波と博多』東京：汲古書院：83-134
仲田浩三（1969）「元のジャワ進討」『東方学』37：101-125
丹羽友三郎（1953）『元代における中国・ジャバ交渉史』東京：明玄書房
野沢佳美（1986）「張柔軍団の成立過程とその構成」『立正大学大学院年報』3：1-18
服部英雄（2014）『蒙古襲来』東京：山川出版社
羽田正（2013）編『海から見た歴史』（東アジア海域に漕ぎ出す1）東京：東京大学出版会
藤野彪（1954）「朱清・張瑄について」『愛媛大学歴史学紀要』3；藤野彪・牧野修二（2012：57-81）
藤野彪・牧野修二（2012）『元朝史論集』東京：汲古書院
舩田善之（2004）評「杉山正明著『モンゴル帝国と大元ウルス』」『史学雑誌』113/11：100-110
舩田善之（2011）「石刻史料が拓くモンゴル帝国史研究―華北地域を中心として―」早稲田大学モンゴル研究所（2011：65-90）
舩田善之（2012/2014）「モンゴルの襄樊包囲戦とその軍事拠点」佐伯弘次・森平雅彦・舩田善之・池田栄史（2012）；改訂版，佐伯弘次（2014：6-15）
舩田善之（2014）「モンゴル（Mongol）帝国（大元）の華北投下領研究」『中国史学』24：139-156
星斌夫（1959）「元代海運運営の実態」『歴史の研究』7：52-71
向正樹（2007）「蒲寿庚軍事集団とモンゴル海上勢力の台頭」『東洋学報』89/3：67-96
向正樹（2008）「クビライ朝初期南海招諭の実像―泉州における軍事・交易集団とコネクション―」『東方学』116：127-145
向正樹（2009a）「元朝初期の南海貿易と行省―マングタイの市舶行政関与とその背景」『待兼山論叢　史学篇』43：29-54
向正樹（2009b）「モンゴル治下福建沿海部のムスリム官人層」『アラブ・イスラム研究』7：79-94
向正樹（2013）「モンゴル帝国の海上進出を読み直す」『ふびと』64：21-44
桃木至朗（1990/1999）「10-15世紀の南海交易と大越＝安南国家」（初出時表題「10-15世紀の南海交易とヴェトナム」“Dai Viet and the South-China Sea Trade from the 10th to the 15th Century.” “Was Dai Viet a Rival of Ryukyu within the Tributary Trade System of the Ming during the Early Le Period (1428-1527) ?”）濱下武志ほか『世界史への問い3　移動と交流』東京：岩波書店，1990；*Crossroads*, 12/1, 1999；Nguyen The Anh et Ishizawa Yoshiaki (eds.), *Commerce et navigation en Asia du sud-est (XIVe-XIXe siecle)*. Paris: L'Harmattan, 1999；桃木至朗（2011：128-156）
桃木至朗（2008）編『海域アジア史研究入門』東京：岩波書店
桃木至朗（2011）『中世大越国家の成立と変容』吹田：大阪大学出版会

森平雅彦（2009）「13世紀前半における麗蒙交渉の一断面―モンゴル官人との往復文書をめぐって―」한일문화교류기금・동북아역사재단편『몬골의 고려・일본 침공과 한일관계』서울：경인문화사；森平雅彦（2013a：205-222, 264-269）

森平雅彦（2011a）『モンゴル帝国の覇権と朝鮮半島』東京：山川出版社

森平雅彦（2011b）「元における高麗の機能的位置―“帝国東方辺境の守り手”として―」（初出時表題「제국 동방 변경에서 일본을 막는다：원 제국 속에서 고려의 기능적 위치」）동북아역사재단・경북대학교 한중교류연구원편『13 ～ 14 세기 고려－몽골관계 탐구』서울：동북아역사재단；森平雅彦（2013a：459-485）

森平雅彦（2013a）『モンゴル覇権下の高麗：帝国秩序と王国の対応』名古屋：名古屋大学出版会

森平雅彦（2013b）「文献と現地の照合による高麗－宋航路の復元―『高麗図経』海道の研究―」森平雅彦編『中近世の朝鮮半島と海域交流』東京：汲古書院：3-262

森平雅彦（2013c）「高麗・朝鮮時代における対日拠点の変遷：事元期の対日警戒体制を軸として」『東洋文化研究所紀要』164：1-50

矢澤知行（2006）「元代の水運・海運をめぐる諸論点―河南江北行省との関わりを中心に―」『愛媛大学教育学部紀要』53/1：161-170

矢澤知行（2007）「元代両淮地方の水運と塩業」『愛媛大学教育学部紀要』54/1：157-164

矢澤知行（2009）「元代の漕運・塩業と両浙社会」大阪市立大学東洋史研究室編『東アジア海域世界における交通・交易と国家の対外政策』（大阪市立大学東洋史論叢　別冊特集号）大阪：大阪市立大学東洋史研究室：37-48

山崎覚士（2008）「貿易と都市―宋代市舶司と明州」『東方学』116：92-108

山崎覚士（2012）「宋代明州城の復元図作成にむけて」『海港都市研究』7：77-82

山崎覚士（2013）「宋代明州城の都市空間と楼店務地（上）」『佛教大学歴史学部論集』3：35-55

山崎覚士（2014）「宋代明州城の都市空間と楼店務地（下）」『佛教大学歴史学部論集』4：85-104

山本達郎（1950）『安南史研究I』東京：山川出版社

四日市康博（2002a）「元朝の中賣寶貨―その意義および南海交易・オルトクとの関わりについて―」『内陸アジア史研究』17：41-59

四日市康博（2002b）「鷹島海底遺跡に見る元寇研究の可能性―元寇遺物実見報告」『史滴』24：111-124

四日市康博（2006a）「元朝斡脱政策にみる交易活動と宗教活動の諸相―附『元典章』斡脱関連条文訳注―」『東アジアと日本―交流と変容』3：11-32

四日市康博（2006b）「元朝とイル＝ハン朝の外交・通商関係における国際貿易商人」森川哲雄・佐伯弘次編『内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム』福岡：櫂歌書房：79-91

四日市康博（2006c）「元朝南海交易経営考―文書行政と銭貨の流れから―」『九州大学東洋

史論集』34：133-156
四日市康博（2011）「モンゴル帝国時代の移動と交流」早稲田大学モンゴル研究所（2011：124-149）
四日市康博（2015）「13 ～ 14世紀における中国－東南アジアの通交と貿易―元朝から見た西洋航路上の南海諸国との関係を中心に」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』21：13-41
早稲田大学モンゴル研究所（2011）編『モンゴル史研究―現状と展望』東京：明石書店
渡辺健哉（2002）「元朝の大都留守段貞の活動」『歴史』98：72-96

【中文】

陳波（2010）「海運船戸与元末海寇的生成」『史林』2010/2：105-111
陳波（2011）「元代海運与浜海豪族」『清華元史』1：215-249
陳波（2013）「元代海道都漕運万戸府的人事変遷」『元史及民族与辺疆研究集刊』26：84-94
陳高華（1978）「元代的海外貿易」『歴史研究』1978/3；陳高華（1991：99-112）
陳高華（1988）「元代的哈剌魯人」『西北民族研究』1988/1；陳高華（2005：288-303）
陳高華（1991）『元史研究論稿』北京：中華書局
陳高華（1995）「元代的航海世家澉浦楊氏―兼説元代其他航海家族」『海交史研究』1995/1；陳高華（2005：238-261）
陳高華（2005）『元史研究新論』上海：上海社会科学院出版社
陳高華・呉泰（1981）『宋元時期的海外貿易』天津：天津人民出版社
陳世松・匡裕徹・朱清沢・李鵬貴（1988）『宋元戦争史』成都：四川社会科学院出版社（再版，呼和浩特：内蒙古人民出版社，2010）
陳世松・喩亨仁・趙永康（1985/2015）『宋元之際的瀘州（修訂本）』香港・瀘州：中国統一出版社（初版，重慶：重慶出版社，1985）
符海朝（2004）「試析金末元初漢人世侯的人格特質―以張柔・張弘範父子作為個案―」『内蒙古社会科学（漢文版）』25/2：21-24
符海朝（2007）『元代漢人世侯群体研究』保定：河北大学出版社
郭建設・索全星（2004）『山陽石刻芸術』鄭州：河南美術出版社
胡昭曦（1992）主編『宋蒙（元）関係史』成都：四川大学出版社
高栄盛（1983）「元代海運試析」『元史及北方民族史研究集刊』7：40-64
高栄盛（1998）『元代海外貿易研究』成都：四川人民出版社
李天鳴（1988）『宋元戦史』（全4冊）台北：食貨出版社
李新峰（2011）「龍湾之戦与元末建康水道」『北大史学』16：77-97
李秀萍（1997）「「甯玉墓誌考」辨誤」『華夏考古』1997/3：87-90
劉暁（2013a）「元鎮守平江“十字路万戸府”考」『隋唐遼宋金元史論叢』3：299-309
劉暁（2013b）「元代軍事史三題―《元典章》中出現的私走小路軍・保甲丁壮軍与通事軍」『中国史研究』2013/3：133-150
孟繁峰・孫待林（1996）「張柔墓調査記」『文物春秋』1996/3：5-15

寧波市文物考古研究所（2013）『永豊庫：元代倉儲遺址発掘報告』北京：科学出版社
尚振明・尚彩鳳（1995）「河南孟県甯玉墓的調査」『華夏考古』1995/3：12-18, 11
沈海波（1991）「河北易県元代張弘範墓誌跋」『文物春秋』1991/4：53-54, 58
史衛民（1998）『元代軍事史』北京：軍事科学出版社
孫克寛（1968）『元代漢文化之活動』台北：中華書局
索全星（1995）「許衎・許師義墓誌跋」『華夏考古』1995/4：95-101
王徳毅・李栄村・潘柏澄（1979-1982/1987）編『元人伝記資料索引』（全5冊）北京：中華書局（初版，台北：新文豊出版公司）
王景荃・尚振明（1995）「甯玉墓誌考」『華夏考古』1995/3：84-87
王頲（2006）「兵敗尾閭―元王朝与爪哇的戦争和来往」『史林』2006/4；王頲（2008：311-328）
王頲（2008）『西域南海史地考論』上海：上海人民出版社
王晩欣（1992）「元代新附軍述略」『南開学報』1992/1：52-62
王晩欣（2009）「元代新附軍問題再探」『南開学報（哲学社会科学版）』2009/2：118-122
王晩欣（2012）「関于元代江南鎮戍体系中杭州与杭州駐軍的若干考述」李治安・宋濤主編『馬可波羅游歴過的城市：元代杭州研究文集』杭州：杭州出版社：34-46
蕭啓慶（1971）「元代的鎮戍制度」国立台湾大学歴史系遼金元史研究室編『姚師従吾先生紀念論文集』台北：国立台湾大学歴史系；蕭啓慶（1983：113-139）
蕭啓慶（1983）『元代史新探』台北：新文豊出版公司
蕭啓慶（1990）「蒙元水軍之興起与蒙宋戦争」『漢学研究』8/2；蕭啓慶（1994：349-381）
蕭啓慶（1994）『蒙元史新研』台北：允晨文化実業股份有限公司
姚景安（1982）編『元史人名索引』北京：中華書局
易県博物館（1986）張洪印執筆「河北易県発現元代張弘範墓誌」『文物』1986/2：72-74
中島楽章・四日市康博（2004）郭万平訳「元朝的征日戦船与原南宋水軍―関于日本鷹島海底遺迹出土的南宋殿前司文字資料」『海交史研究』2004/1：39-50
中国文物研究所・河北省文物研究所（2004）編『新中国出土墓誌　河北〔壱〕』（全2冊）北京：文物出版社
中国文物研究所・河南省文物研究所（1994）編『新中国出土墓誌　河南〔壱〕』（全2冊）北京：文物出版社

【謝辞】 本研究はJSPS科研費23222002，26284097，26370826，26580131の助成を受けたものである。

【注】

（1）モンゴル語の国号はイェケ・モンゴル・ウルスYeke Mongγul Ulus（大モンゴル国）といい，1271年（至元8年，辛未）以降，漢語の国号としては「大元」を用いた。従来，多くの研究者が「元」「元朝」を用いる傾向にあり，また近年の日本では「大元ウルス」

を用いる研究者も増えているが，クビライ以降もモンゴル語の国号はイェケ・モンゴル・ウルスであったこと，また，筆者としては帝国としての連続性を意識すべきとの意図から，クビライ以前も以後もモンゴル帝国と称する。モンゴル帝国の国号に関する筆者の考え方については，舩田善之（2004：106–108; 2014：139, 153, nn.4, 6）を参照。

（2）ここでそれらのすべてを概観する余裕はないが，さしあたって，基本文献として川添昭二（1978）の整理・議論と，近年の成果として石井正敏（2013）を挙げておく。

（3）以下，地名の後の（　）内に現在の行政区画名を注記する。

（4）服部英雄（2014：365–371）の異論もあるが，本稿では従わない。

（5）この発掘調査とその成果については，池田栄史・根元謙次（2009–2011），長崎県松浦市教育委員会（2012），池田栄史（2013; 2015）などを参照。それ以前の調査の成果については，四日市康博（2002b）がモンゴル帝国史の立場から整理している。

（6）例えば，杉山正明（1996：124–135; 2001：324–326）など。

（7）森平雅彦（2011a：7–31; 2011b/2013a; 2013c）及びこれらが掲げる研究を参照。

（8）陳世松・喩亨仁・趙永康（1985/2015），陳世松・匡裕徹・朱清沢・李鵬貴（1988），李天鳴（1988），蕭啓慶（1990），胡昭曦（1992），舩田善之（2012/2014）及びこれらが掲げる研究を参照。

（9）モンゴル帝国の中国本土における軍事制度については，まず，『元史』「兵志」などに基づいて考察を加え，またその英文訳注を付したHsiao, Ch'i Ch'ing（1978），通史の一冊としてまとめられた史衛民（1998）を挙げることができる。蕭啓慶（1971）は駐屯軍に関する専論である。江南における駐屯軍としては，政治史・軍団史研究として独自の視点から考察を深めた堤一昭（1996; 1998; 2000a; 2000b）の一連の研究が重要な成果である。そのほか，特定の地域や万戸府に焦点を当てた大葉昇一（1990），劉暁（2013a; 2013b），王暁欣（2012）がある。モンゴル帝国に編入されて「新附軍」と称された旧宋軍については，王暁欣（1992; 2009）がある。そのうち水軍・海軍については，蕭啓慶（1990），中島楽章・四日市康博（2004），中島楽章（2013）が検討を加えている。そのほか，以上が掲げる研究を参照。

（10）藤野彪（1954），星斌夫（1959），植松正（1968; 2001; 2003; 2004; 2007），高栄盛（1983），陳高華（1995），檀上寛（2001; 2003; 2006：38–47），矢澤知行（2006; 2007; 2009），陳波（2010; 2011; 2013）及びこれらが掲げる研究を参照。

（11）桑原隲蔵（1923/1989），陳高華・呉泰（1981），高栄盛（1998），四日市康博（2002a; 2006a; 2006b; 2006c; 2011; 2015），檀上寛（2006：26–30），向正樹（2007; 2008; 2009a; 2009b; 2013：29–30）及びこれらが掲げる研究を参照。

（12）榎本渉（2001/2007），檀上寛（2006：30–37）及びこれらが掲げる研究を参照。

（13）海域史の枠組みが提唱されて以来，帝国・王朝権力と海域の関係性についても，新たなアプローチがなされるようになっている。さしあたって，桃木至朗（2008）や羽田正（2013）を参照。

（14）『元史』には伝が立てられていないが，『新元史』巻165（681）に伝が立てられている。

なお，「甯玉墓誌銘」は「甯」を「寧」に作るが，本稿では「甯」で統一する。

(15) 以下，前近代の月日は旧暦による。

(16)「甯玉墓誌銘」:「公生於丙申九月十八日,薨於大徳六年壬寅三月十日，享年六十有七。……。公治命帰葬河陽，是歳九月十六日丙午同母夫人蕭氏柩帰。卜以壬寅十二月十三日壬申葬於宋荘祖墳之側」(II.26-37, 30-31, 207)。「甯玉神道碑」:「春秋六十有七，考終於所居之正寝，実大徳六年三月十日也。……。公薨後四年，昭毅君居仁，挙公之柩，与三夫人合葬河陽先塋之次，状以請銘神路之碑」(66b5-7, 67b4-5, 301)。後者では，甯玉の死去四年後に，三夫人とともに合葬されたと記している。死去四年後というのは，神道碑の撰文を閻復に依頼した時期を指すのかもしれない。

なお，本稿では，「甯玉墓誌銘」は，中国文物研究所・河南省文物研究所（1994：vol.1, 218）と尚振明・尚彩鳳（1995：15）の拓影に，「甯玉神道碑」は，乾隆『孟県志』巻8「金石」64b-68a（『石刻史料新編』ser.3, vol.29, 402-404）の録文に，それぞれ基づき，適宜他のテキストを参照して校訂した。また，参照の便を考え，前者については，拓影の行数及び中国文物研究所・河南省文物研究所（1994：vol.2, 206-207）の録文の頁数を，後者については，乾隆『孟県志』の葉数・行数及び『全元文』（vol.9, 299-303）の頁数を，それぞれ提示する。

(17) 1994年12月における甯玉墓の調査については，尚振明・尚彩鳳（1995）を参照。尚振明・尚彩鳳（1995：12）及び王景荃・尚振明（1995：84）は，河南省の文物普査事業の過程で，1984年5月に，孟県文物普査隊が東小仇郷政府（趙和鎮東小仇村）の敷地内で本墓誌銘を発見したと述べる。中国文物研究所・河南省文物研究所（1994：vol.1, 218），尚振明・尚彩鳳（1995：12）の説明とつきあわせるならば，甯玉墓は，文化大革命中の1973年8月に破壊を受け，墓誌銘の原石は，この時に取り出され，それからあるいはしばらく後から1984年5月まで，東小仇郷政府に置かれていたのであろう。なお，墓室の副葬品はすべて盗まれていたとのことである。尚振明・尚彩鳳（1995：12-14）によれば，甯玉墓は，旧県城の西約4kmに位置する西虢郷（西虢鎮）金山寺にあり，調査が実施された1994年12月の時点では，土盛りの塚と文武臣及び羊馬など石像を備えた神道が残存していた。地界碑は，墓誌銘と同じく，孟県文化館に収蔵された。地界碑の拓影と録文も，尚振明・尚彩鳳（1995：13-14）に掲載されている。

(18) 王景荃・尚振明（1995）及び李秀萍（1997）が，その内容の紹介と考察を行っており，本論でも参照した。

(19) ジャワ遠征については，丹羽友三郎（1953：79-169），仲田浩三（1969），冨尾武弘（2006），王頲（2006）を参照。

(20) 録文に続いて，詳細な考証も付されている（乾隆『孟県志』巻8「金石」68a-70b；『石刻史料新編』ser.3, vol.29, 404-405）。

(21) 前注（16）。

(22) なお，尚振明・尚彩鳳（1995：17-18, 11）は，康熙『孟県志』巻6「人物」から「甯玉神道碑」の録文を移録しているが，筆者は，康熙『孟県志』巻6「人物」の録文をまだ

実見していない。

(23)「甯玉墓誌銘」:「公生於丙申九月十八日」(ll.26-27, 207)。「甯玉神道碑」:「問年同丙申也」(6b6, 301)。

(24) 張柔及びその一族と軍閥については，孫克寛（1968：271-295），野沢佳美（1986），孟繁峰・孫待林（1996），符海朝（2004; 2007：103, 143, 180-185）などを参照。

(25)「甯玉墓誌銘」:「公姓甯氏，諱玉，世孟州河陽人。曾大父諱淵，仕金為孟津渡巡検。大父諱源，敦武校尉・河陽屯田副使。考諱泉，孝厚忠信，著称遠邇，郷里呼為甯仏。仕国朝為懐孟勧農副使，遷提領課税所官。妣夫人韓氏，貞順淑哲，中外称其賢孝。公資賦沈勇，有胆志，尤便習弓馬。初隷水軍，張万戸奇其壮偉，辟署孟津河渡司」(ll.4-7, 206)。「甯玉神道碑」:「公諱玉，孟州河陽人。曾祖諱淵，金盟津渡都巡検。祖諱源，敦武校尉・河陽屯田提挙司副使。考諱泉，懐孟勧農副使，慈祥愷悌，与物無忤，郷里称善人。批韓氏，生公，体貌魁梧，膂力絶人。児時聚嬉，好作戦陣状。年十七，以鼓枻之勇為水軍，万戸張侯所知，署盟津渡長」(64b7-65a1, 299)。

(26) この鄂州の役に関するクビライらの行動の背景とその政治史上の意義については，杉山正明（1982）を参照。その詳細な状況については，李天鳴（1988：743-774）を参照。

(27) 1268年（至元5年，戊辰）に張柔が死去した後は，第八子の張弘略（?-1295）がその職務を継いだ。

(28)「甯玉墓誌銘」:「歳戊午，憲宗皇帝大挙南征，命世祖皇帝総東道兵，出襄・鄧・鄂・岳。公亦分督粮餉，応援鄧・宿等処。己未，従本軍扈蹕南還，以功授百夫長。中統建元之二年，世祖皇帝北狩，有旨命万戸張公修築大都。公亦分董將士。甫畢功，移屯膠州，攝千夫長」(ll.7-10, 206)。「甯玉神道碑」:「鄂渚之役，大軍駐南陽，遣公督漕宿・亳，軍食以済。明年，従世祖皇帝渡江，以労補百夫長。中統初，定鼎於燕，召公充河道官，疏浚玉泉河渠」(65a1-4, 299)。

(29)「甯玉墓誌銘」が，後文でジャワ遠征から帰還した息子の甯居仁がクビライに謁見して下賜を受けたことを誇るように叙述しているのと対照的である。「甯玉墓誌銘」:「及帰，俘其王及本国珍器以見世祖皇帝，大加寵錫金銀衣物」(ll.24-25, 207)。

(30)「甯玉神道碑」は，1266年（至元3年，咸淳2年，丙寅）に繫年するが，多くの史料によれば，襄樊の本格的な包囲及び軍事拠点造築は1268年に始まった。単なる移録の誤りに過ぎないか，アジュ率いるモンゴル軍の宋遠征を視野に入れた準備，偵察や単発的な侵入などを踏まえた紀年であろう。

(31)「甯玉墓誌銘」:「五年，我軍始囲襄樊，開鄧州七里等河，立埧堰三十餘所，下戦艦二百餘艘，直抵新野，我軍餉道無梗。七年，丞相史公俾公権本軍万戸，進屯万山，修繫浮橋，累著労績。大丞相伯顔公倚重公如左右手」(ll.10-12, 206)。「甯玉神道碑」:「至元三年，有事襄樊，被帥府檄，導鄧之七里河，由新野而南，以通転漕，囲守襄陽，立万山屯堡，攝□□府事，兼主浮梁津渡，教習水戦」(65a4-6, 299)。

(32) 李謙「故鎮国上将軍江東道宣慰使蒙古漢軍都元帥張公墓誌銘并序」(中国文物研究所・河北省文物研究所2004：vol.1, 165, ll.16-21, vol.2, 120)，王磐「大元故銀青栄禄大夫平

章政事武烈張公神道碑銘」（光緒『定興県志』巻17「金石志」13a-14a, 935-937）。張弘範の墓誌銘については，易県博物館（1986）及び沈海波（1991）も参照。

(33) 襄陽の東，漢水が東から南へ湾曲する地点で合流する白河（唐白河）の可能性が高い。白河については，李天鳴（1988：891-892, 945, 954-955, 1007, pls. 129, 131, 134, 141-142），舩田善之（2012/2014：9-11）を参照。

(34)「甯玉墓誌銘」:「是年既克襄樊，命公以戦艦百艘，領精兵千人前行，従下黄州・寿昌・安慶・池州・蕪湖等処，所向輒克」(l. 12, 206)。「甯玉神道碑」:「既□淮安忠武王統大軍而南，公以千人導前，至白河，結浮橋済師，遂抜沙（陽）〔洋〕。十一年冬，師次臨江，分道以進，与宋人合戦（中江）〔江中〕。公将勇士千人，以軽舸五十艘，径奪南岸，力戦却敵，指揮戦艦分渡諸軍，凡三昼夜而畢。自寿□□黄池口，所過浮梁立就，兵無留。行至彭蠡湖，風濤洶湧，梁成輒壊者数四。公言，『梁之不成，力不至也』。躬督士卒，取瀕江場圃巨石為碇。忠武立馬以需其成。進及丁家洲，宋将夏貴・賈似道舳艫蔽江，忠武命公列樹四砲，撃其中堅，舟多覆溺，宋兵大潰，威乗破竹，下蕪湖，取姑熟，入建鄴」(65a6-b4, 299-300)。『元史』巻127「伯顔伝」:「〔至元十二年春正月〕伯顔至湖口，遣千戸甯玉繋浮橋以渡，風迅水駛，橋不能成，乃禱于大孤山神，有頃，風息橋成，大軍畢渡」(3104)。

(35) 李新峰（2011：89, 97）によれば，龍湾は秦淮河が長江に合流する地点で，建康にとって重要な軍事上の要衝であり，モンゴル時代には水站も設置された。

(36)「甯玉墓誌銘」:「十二年三月，制授金符，管軍千戸。時公分兵守建康龍湾口。忽一夕，南船蔽江自儀真来，斫公所守浮橋。公縦舟逆撃，大破斬之。十三年，命公前行，径擣呉会・松江・太湖諸処。制升授宣武将軍・管軍総管。〔十〕四年，制改明威将軍，鎮守呉江長橋。十五年，制換金虎符，仍前鎮守。是年松江蟠龍寺僧等作乱，公又平之。制改昭勇大将軍，為本軍万戸。初国朝官制簡約，任軍職者自百夫長・千夫長，而至万戸者為極貴，国朝至今因之。至是，公以軍功爵為万戸，升散階至鎮国上将軍，行浙西道呉江長橋都元帥府事。二十二年九月，又制授沿海上万戸」(ll.12-17, 206)。「甯玉神道碑」:「幕府上功，明年三月，拝管軍千戸，佩金符。建鄴内外，橋梁・戦艦悉主之，又督造巨艦可勝百万者。艦成，分二十艘付公，守龍湾，藩蔽東寇。七月，真州守将夜来斫営，公潜以巨艦出其後，夾撃之，殺溺殆尽。従抜常州，取平江。平江之南曰太湖，跨越数州。自呉江属嘉興，旧有長橋，実南北要衝。忠武命公完葺腐敗。鎮守須其人，特以□公。時江南甫下，反側者衆，且具区瀕海，羣盗淵藪。公密断諸港汊，置軽舸数十，上下巡邏以察非常，毎有窃発，随折其萌。華亭澱山諸賊，聞皆解散。殲其渠魁陶機察・曹横天等八人，餘党不可勝紀。又降塩寇□百，併獲妻孥。起屋百楹以居戍兵，置安楽堂三区，以養病卒，招集流民四万五千有畸，俾安生業，闔境為之宴然。公前後七拝璽書之命，由金符管軍千戸，遷宣武将軍・管軍総管，明威将軍・鎮守長橋等処総管，尋降虎符，職任仍旧。陞昭勇大将軍・管軍万戸。未幾，就帯已降虎符，鎮国上将軍・浙西道呉江長橋都元帥・□沿海上万戸，佩金虎符」(65b4-66a9, 300)。『元史』巻127「伯顔伝」:「〔至元十二年十二月〕庚戌，……。遣甯玉修呉江長橋，不旬日而成。……。丙寅，

……。伯顔発平江，留游顕・懐都・忽都不花，屯兵鎮守。別遣甯玉守長橋」（3108）。

（37）前注（36）。

（38）『元史』巻13「世祖本紀10」至元22年2月乙巳：「詔改江淮・江西元帥招討司為上・中・下三万戸府，蒙古・漢人・新附諸軍，相参作三十七翼。上万戸，宿州・蘄県・真定・沂郯・益都・高郵・沿海七翼。中万戸，棗陽・十字路・邳州・鄧州・杭州・懐州・孟州・真州八翼。下万戸，常州・鎮江・潁州・廬州・亳州・安慶・江陰水軍・益都新軍・湖州・淮安・寿春・揚州・泰州・弩手・保甲・処州・上都新軍・黄州・安豊・松江・鎮江水軍・建康二十二翼。翼設達魯花赤・万戸・副万戸各一人，以隷所在行院」（273）。『元史』巻99「兵志2」鎮戍：「〔至元〕二十二年二月，詔改江淮・江西元帥招討司為上・中・下三万戸府，蒙古・漢人・新附諸軍，相参作三十七翼。上万戸，宿州・蘄県・真定・沂郯・益都・高郵・沿海七翼。中万戸，棗陽・十字路・邳州・鄧州・杭州・懐州・孟州・真州八翼。下万戸，常州・鎮江・潁州・廬州・亳州・安慶・江陰水軍・益都新軍・湖州・淮安・寿春・揚州・泰州・弩手・保甲・処州・上都新軍・黄州・安豊・松江・鎮江水軍・建康二十二翼。毎翼設達魯花赤・万戸・副万戸各一人，以隷所在行院」（2543）。

（39）同年4月に失脚した盧世栄に対する糾弾として，「沙全を万戸の甯玉に替えて浙西の呉江に鎮戍させた（以沙全代万戸甯玉戍浙西呉江）」（『元史』巻205「姦臣伝」盧世栄，4570）ことが挙げられていることから明らかなように，甯玉は，4月以前に，行浙西道呉江長橋都元帥府事の職を去っていた。

（40）堤一昭（1998：189）は杭州湾近傍の沿海地帯と推定する。可能性としては，海塩県一帯の沿岸部の東海口・西海口・南海口の総称，あるいは，澉浦（浙江省嘉興市海塩県澉浦鎮）や定海（浙江省寧波市鎮海区）を含む三地点が考えられる。

（41）『元史』巻11「世祖本紀8」至元18年11月丙戌：「勅征日本回軍後至者分戍沿海」（236）。同年同月己巳の条（235）で，高麗方面の鎮辺万戸府設置を述べていることから，こちらは帰還した江南軍を指しているのであろう。

（42）前注（38）。

（43）延祐『四明志』巻8「城邑攷上」公宇・万戸府：「在録事司西北隅永済坊，即宋簽判庁」（5648）。

（44）至正『四明続志』巻3「在城」公宇・万戸府：「在西南隅永済坊明遠楼西，元係宋府倉并節推庁基。至元十三年，置立沿海招討司，後為沿海左副都元帥府，尋改沿海上万戸府」（5859）。

（45）山崎覚士（2012; 2013; 2014）が，この図を含め，各種史料に基づいて，宋代明州・慶元府の都市空間の緻密な復元を試みており，本稿でもこの成果から多くの情報を得ることができた。なお，本図は山崎覚士（2012：80）にも掲載されている。

（46）延祐『四明志』巻8「城邑攷上」公宇・永豊庫：「在録事司西北隅奉国楼裏，平準庫之後」（5650）。同・慶元路平準行用交鈔庫：「在録事司西北隅純孝坊，宋節推庁故基」（5649）。至正『四明続志』巻3「在城」公宇・永豊庫：「在西北隅明遠楼裏，東首，元係宋常平

倉基」(5861)。同・平準庫：「在西北隅清瀾橋東，元係宋簽判庁」(5861)。永豊庫については，その発掘成果報告書である寧波市文物考古研究所（2013）を参照。

(47) 前注（38)。

(48) これ以外の論点からも，堤一昭（1998：174-175, 196-197, n.5, 198, n.21）は，モンゴル帝国の「江南支配の脆弱性」説の問題点を先見的に指摘している。

(49) この碑文の内容については，本稿の続編で検討を加える。

(50) 至正『四明続志』巻3「在城」公宇・万戸府（5860-5861)。

(51) 王暁欣（2012：43-45）も，華北の地名を冠する万戸府が杭州に駐屯していたことを明らかにしており，堤一昭の先見を裏づける。

(52) 江南行台の成立と沿革については，堤一昭（1996)，工藤健（2003）参照。

(53) 前注（39)。

(54) 陳高華（2005：300）は，カラダイとその職を継いだ息子のカラ・ブカ Qara buqa（哈剌不花）に言及した上で，一定数のカルルク人が慶元路に居住していた可能性を示唆する。また，櫻井智美（2009：177-179）は，慶元路にカルルク人が集住した背景として，カラダイとその軍団の慶元進駐を挙げ，カラダイの経歴を簡潔に紹介している。なお，興味深いのは，甯玉と交替して呉江長橋の長官となった沙全（前注（39)）もカルルク人であった点である。甯玉の呉江長橋都元帥から沿海上万戸府万戸への配置転換は，本稿で述べた歴史的な背景や本人の資質のほかに，カルルク人の駐屯軍ネットワークも影響していたのかもしれない。

(55)「重建沿海上万戸府達魯花赤哈剌觧徳政記」（至正『四明続志』巻3「在城」公宇・万戸府, 5859-5860)。『巴西集』巻上「故栄禄大夫平章政事鞏国武恵公神道碑銘」(523)。『危太樸文集』続集巻8「雲南諸路行中書省右丞贈栄禄大夫平章政事追封鞏国公謚武恵合魯公家伝」(575)。『元史』巻132「哈剌觧伝」(3215-3217)。

(56) 宋代の状況であるが，明州（モンゴル時代の慶元路）から甬江を経て舟山列島海域を抜ける航路については，森平雅彦（2013b：221-237）に詳しく復元されている。同様に，宋代明州の位置と都市の構造については，山崎覚士（2008; 2012; 2013; 2014）が参考になる。

(57) 本稿第2節，p.6及び前注（28）参照。

(58) 沿海上万戸府が設置された1285年（至元22年，乙酉）には，10月に征東行省を再設するなど，クビライは第三次日本遠征を企図して様々な準備を行っている。翌1286年（至元23年，丙戌）正月に，日本遠征は取りやめとなるが，1287年（至元24年，丁亥）に，甯玉の上官のカラダイは入朝し，クビライから直に日本について下問され，その翌1288年（至元25年，戊子）にも再度召喚されている。『元史』巻13「世祖本紀10」至元22年10月癸丑：「立征東行省，以阿塔海為左丞相，劉国傑・陳巖並左丞，洪茶丘右丞，征日本」(280)。『元史』巻14「世祖本紀11」至元23年正月甲戌：「帝以日本孤遠島夷，重困民力，罷征日本，召阿八赤赴闕，仍散所顧民船」(285)。『元史』巻132「哈剌觧伝」：「〔至元〕二十四年，入朝，帝問日本事宜，哈剌歹応対甚悉，令還戍海道。授浙東宣慰

使，賜金織文段・玉束帯・鞍勒・弓矢有差。二十五年，枢密以水軍乏帥，奏兼前職。冬，徵入見」(3217)。

(59) このベトナム遠征については，山本達郎（1950：213-250）に詳しい。また，桃木至朗（1990/1999：143-147）は，モンゴル帝国のベトナム遠征と南海交易について，近年のモンゴル帝国史研究の視点を踏まえながら，同時に反論を加えて，明快にその変遷と構造を提示している。

(60) 沿海万戸府など江浙に駐屯していた軍団の遠征先が日本からベトナムなど南方へシフトしていった要因の一つとして，それらの駐屯軍の統帥権が，それまで福建方面で活動し，海上交易にも関与していたマングダイによって掌握された状況（堤一昭2000：26-29；向正樹2009：37-40；本稿p.10）を挙げることができるかもしれない。その後，マングダイが，1290年（至元27年，庚寅）9月，沿海上万戸府など江浙方面の3つの万戸府を福建へ一時的に配置転換したことにも，その傾向をみることができよう。『元史』巻99「兵志2」鎮戍：〔至元二十七年九月〕調江淮省下万戸府軍於福建鎮戍。十一月，江淮行省言，『……。今福建盗賊已平，惟浙東一道，地極辺悪，賊所巣穴，請復還三万戸以鎮守之。合剌帯一軍戍沿海・明・台，亦怯烈一軍戍温・処，札忽帯一軍戍紹興・婺州。……』。枢密院以聞，悉従之」(2544)。

　また，向正樹（2009：38-39）は，このマングダイによる万戸府の配置転換を独断と述べた上で，その沿海地域における軍事的支配力と泉州（福建省泉州市）を起点とする海外貿易に対する支配力に注目する。

(61)「甯玉墓誌銘」:「二十四年，従皇子鎮南王征交趾。及還，第功行賞最為優渥。公亦以痼疾数請告矣。……。至是，朝議以長子居仁襲爵。……。公自退居呉江，優游晩節，未嘗不念念在国」(ll.17-19, 23, 26, 206-207)。「甯玉神道碑」:「二十三年，公以久事戎行，起居蒸湿，積労成病，謝事家居。俄奉宸旨，従鎮南王征交趾。公力疾以行，師至安南，公当前隊，闢山治道，樹立営柵，率身先之，凌冒炎瘴，痼疾増劇，王憫其忠勤，表公長子居仁襲職。公逸老呉江私第，晩節徜徉，以自娯楽」(66a10-b3, 300)。

(62) 渡辺健哉（2002）は，大都建設を検討するに際し，都市プランなどの立案者や事業の統括者ではなく，現場の陣頭で工事を指揮した段貞に焦点を当てることにより，その現場の実態や彼が果たした役割を解明し，大都の建設と管理運営に新たな光を照射した。本稿も，この着想と軌を一にするものである。

(63) 舩田善之（2011：85-86, n.19）でも，その展望を端的に述べている。